

## 平成30年度第7回三重県総合教育会議 議事録（概要）

- 1 日 時 平成31年2月4日（月） 15:30～17:00
- 2 場 所 J A 三重ビル 5階 大会議室
- 3 出席者 知事、教育長、教育委員4名
- 4 議 題
  - ・体力向上について
  - ・スポーツの推進について
  - ・その他
- 5 主な意見 ○:教育長・教育委員、●:知事

### <体力向上について>

- 全般的に改善が図られてきたのは、様々な取組が功を奏していると考えられる。体力・学力双方で良い調査結果が出ている学校のデータを分析し、相関関係を調べてみてはどうか。  
継続的に不得意種目が存在することについて、なぜそのような傾向があるのか原因を科学的な視点で考察することが必要である。  
体育の授業の目的は、不得意な生徒も含めた体力の向上や、「やればできる」という経験を積ませることである。体育の教員は自分の専門性に注力しすぎる傾向があるので、そのことを自覚して、授業改善に取り組むことが大切である。
- すべての子どもたちが楽しく運動に取り組むようになるためには、体育の授業において、苦手意識を持たせることがないような授業づくりをする必要がある。そのためには、楽しみながら体を動かすことを授業の中心に据えるべきである。  
就学前の幼児は、外遊びの頻度が高いほうが、運動能力が高まることが調査によって示されている。体を動かすことのメリットを保護者に知らせていくことが大切である。
- 体力の向上は学力の向上にもつながり、そのためには、各家庭での働きかけが欠かせない。特に(乳)幼児期は、誰もが純粋に体を動かすことを楽しめる時期であり、親も子どもと共に楽しめるような体力向上の取組を促進する施策が必要である。健全な体力の向上のためには食育も重要なので、保護者は食育について一定の知識を持つことが大切である。
- 子どもたちに運動習慣をつけることが大切であり、そのためには運動習慣が乏しい児童生徒が多く項目において低位であるという調査結果が各家庭に伝わるよう、改善提案を加えたフィードバックを強化することが必要である。  
運動の苦手な生徒が得意になった要因を探るなど、経年変化に

着目することで、より説得力のあるデータを提示できる。これらをわかりやすくまとめたリーフレットを作成することでターゲットを絞った提案もできるのではないか。

- 体を動かすことやスポーツそのものが楽しいと感じることができ、児童生徒が増えることが重要である。そのためには、就学前の幼児期に家庭で体を動かすことが楽しいと思えるような状況になることが大切である。また、保育士や幼稚園教諭等を対象とした研修会等を開催し、子どもたちの体を動かす遊びの充実につなげていきたい。
- 平成30年度の調査によると、改善提案を加えて公開した割合は、小学校では約7%、中学校では約4%と極めて少なく、情報提供の仕方に課題がある。情報の共有がされていない状況で改善提案をしても効果が薄い。外部人材にデータの分析を依頼するなど、教員に過度の負担がかからないような工夫をして、家庭や地域との情報共有を図ってもらいたい。

全体的な数値の底上げが図られていることは、市町教育委員会をはじめ関係者の努力の表れである。さらなる体力向上のために、地域ごとのデータを分析して、改善提案につなげてほしい。

#### <スポーツの推進について>

- 部活動ガイドラインに基づく休養日や部活動時間の遵守状況について、全ての部で遵守できている中学校が約7割、県立学校が約4割にとどまっており、解決すべき大きな課題である。外部の地域人材による指導や、スポーツ少年団、総合型地域スポーツクラブなどに生徒が参画できる仕組みづくりが必要である。  
また、三重県ではスポーツの外部の地域人材について、地域からの紹介が少ない状況であるため、地域の人材を活用できる関係づくりを進めることも必要である。
- 東京オリンピック・パラリンピックに続き、三重とこわか国体が開催されることから、三重県においてはスポーツを推進するまたとない大きなチャンスである。スポーツをみる、するだけでなく、支えるという立場から関われることに加え、ボッチャ、スポーツチャンバラなど新しいスポーツを知る機会でもある。
- JALがネクストアスリートプロジェクトとして、スポーツ能力測定会を全国23か所で実施しており、四日市市で昨年9月に開催された。一人ひとりの長所・短所に合ったトレーニングのアドバイスをもらえたり自分に適したスポーツを選んでもらえる。参加者から非常に好評だったため、このような民間企業も巻き込んだ

取組を県でやったらよいと思う。

- 三重県は中学校男女で運動部活動参加率が全国的に高く、地域クラブ活動参加率は全国より低い。運動部活動が運動時間量を支えている現状であるが、少子化で部活動が成立しない学校が増えてきていることから、地域クラブの活動に重点を移し、学校を越えて地域でスポーツに取り組める環境を整える方向性を打ち出せないか。指導者側の意識はアスリート育成傾向にある一方、子どもの意識は友達と楽しむ、好きなスポーツができる点にあり、教員と子どもの意識のギャップを埋めるには地域クラブのほうが向いているかもしれない。
- 部活動のあり方については時間をかけてしっかりと議論していきたい。地域のスポーツ人材の活用については課題を整理しつつ受け入れ体制を整えていきたい。スポーツを支えるという関わり方については、今後さらに広めていきたい。子どもがスポーツを好きになるように民間企業の取組も積極的に活用したい。
- 国体・全国障害者スポーツ大会局の「コーチアカデミー」の取組で得たノウハウ等を教育委員会内でもしっかり共有してもらいたい。部活動ガイドラインを遵守してもらうためにどのようなサポートが必要か、もう少し突っ込んで考える必要がある。インターハイのレガシーは大会運営のノウハウだけではなく、子どもたちに生かすという視点から捉える必要がある。去年の夏の甲子園に出場した白山高校のように、部活動を通じて学校を地域に開いていくことで、教員の負担軽減につながるといったことも考えられるのではないか。

#### <その他>

- 先般千葉県野田市で大変痛ましい事案が発生した。虐待のみならずいじめについても、子どもとの約束はしっかり守ってもらわなければならない。県内でこのようなことが絶対に起こらないよう、教育委員会としても、子ども・福祉部としっかり連携して、改めて周知徹底・対応確認を行って欲しい。

以上